

# バンクーバー会議(1983.7)と

## ユーカリスト 聖餐の革新

### 藤 間 繁 義

今日エキュメニカル・ムーブメントは、社会的・政治的な活動において、この運動に参加している諸々のキリスト教会が、共に重荷を分ち担うのみならず、長い間の懸案であった教理・礼拝・聖職位に関する問題においても大きな進展<sup>(1)</sup>を遂げつつある<sup>(2)</sup>。これは全世界のキリスト教会にとっても、個々のキリスト者にとっても喜ばしい限りである。1910年エディンバラにおいて、はじめて国際宣教会議<sup>(3)</sup>(International Missionaries Conference)が開催されて以来、それぞれの教会が告白するところの信仰と、伝統的に保持してきたところの職制<sup>(4)</sup>を、直ちに一致へと踏出し得なかったために、信仰と職制研究会議<sup>(5)</sup>(Faith and Order)<sup>(6)</sup>を組織して研究討議を深めて行くことが謀られたのであるから、実に、二つの世界大戦と半世紀の時間を経過して、いま、始めて公式に実行されるに至ったことは、教会の一致を目標として始められたこの運動<sup>(7)</sup>にとっても、キリストの体としての教会そのものにとっても、極めて大きな意味をもつものであるから、どれだけ高く評価しても高く評価し過ぎることにはならないだろう。

それ故、本稿においては、今夏カナダのバンクーバーで行なわれた世界教会協議会<sup>(9)</sup>(WCC)の第6回総会における礼拝と、リマ典礼を中心として、教会の真の一致の大きく前進しつつあるエキュメニカル・ムーブメントについての考察を加えようとするものである。

## I 世界教会協議会第六回総会（1983年、バンクーバー）

1983年7月24日から8月10日迄の18日間にわたって、世界協会協議会（WCC）の総会が、カナダのバンクーバー市ブリティッシュ・コロンビア大学を会場として開催された。この総会は、1948年アムステルダムにおいて開催された第一回目の総会から数えて、エバンストン（Evanston, USA, 1954）ニューデリー（New Delhi, India, 1961）、ウプサラ（Uppsala, Sweden, 1968）、および、ナイロビ（Nairobi, Kenya, 1975）に次ぐ第六回目の総会であった。

第二次世界大戦が終って間もない1948年8月22日（日）、アムステルダムのニーウェ・カートにおいて、最初のこの会の総会が開催された時には、大戦による破壊と疲弊・混乱のさなかにあったのにも拘らず、44ヶ国147教会から351名の公式議員が参加した。もとより、これらの議決権を有する公式代議員以外にも補欠代議員、顧問団、信認状を携えた訪問者、および青年代議員等々を含めて数百名の参加者を擁する一大国際会議として、戦後の世界に大きな希望の光を投げかけた。この時参加したアジアの諸教会と小数ながら代表を派遣したアフリカの自立諸教会からの参加は、全体の会議を勇気付け、人々の心を鼓舞したが、ローマ・カトリック教会と東ヨーロッパ諸国の正教会ならびにプロテスタント諸教会の参加者がなかったことは、大きな悲しむべき現実としてこの会議の参加者たちも、全世界の教会にも重くのしかかった<sup>(10)</sup>。

その一つは大戦の終結とともに始まった米ソ両国を主軸とする東西陣営間の確執によるものであって、コンスタンチノーブルおよびギリシア正教会、レバノン教会、西側世界に移住した東欧プロテスタント教会からの参加が見られたのにも拘らず、圧倒的多数の正教会信徒を擁するロシア正教会、ブルガリア正教会、ルーマニア正教会からの参加が皆無であったことは、ハンガリー、チェコ・スロバキア、東ドイツのプロテスタント教会が代表を送り得なかったことと共に、国家間の政治的な力が大きく作用していることを明白に見せつけるものであった。

この東欧社会主義諸国内の諸教会との関係は、キリスト教平和会議や、ローマ・カトリック教会とポーランドをはじめとするカトリック教会への働きかけ<sup>(11)</sup>等によって徐々に改善され、緊張緩和の時代を経て交流も大いに活性化したし、<sup>(12)</sup>

国際会議や集会への参加も制限が緩和されて、東欧プロテスタント教会の代表たちもニューデリー総会以来常に参加するようになってきた。

他方、ローマ・カトリック教会の側からのエキュメニカル・ムーブメントに対する関わり方は、当初極めて冷やかであった。

マリン会談以来<sup>(13)</sup>アングリカン教会とローマ・カトリック教会との間には、地域的な活動や行事において個人としての交りを深めて行った人たちも多く、<sup>(14)</sup>教会一致を求めての共同研究会も第二次大戦の始まる前迄は繰返されていたのであるが、<sup>(15)</sup>残念なことに第二次大戦の勃発によって国交が途絶えてしまい、漸く活発になりかけていたエキュメニカル、ムーブメントは停滞せざるを得なくなった。殊に、カトリック教会との間の一致のための共同の歩みも、国家間の戦争状態の中に在っては、大きな進展は望み得なかった。<sup>(16)</sup>けれども、このアムステルダムにおいて開催された世界教会協議会の最初の会議に際して、ローマ・カトリック教会からの参加者が一人もなかったことは、この大会に代表を送った諸教会にとっても、また総会の準備にあたった者たちにとっても、大きな打撃であり、同教会の冷ややかな反応は、ローマ・カトリック教会をも含めての教会の一致を実現することが、どれ程困難なものであるかを痛感せしめられたのである。<sup>(17)</sup>

しかしながら、このようにして創始された世界教会協議会は、WCCの通称と共に、強大な世界機構の一つとしてスイスのジュネーブに本部を置いて、継続的な歩みを展開することになった。その内部機構は、Division of Studies, Division of Ecumenical Action, Division of Inter-Church Aid and Services to RefugeeおよびDivision of the Churches on International Affairsの四局とDepartment of Finance and AdministrationおよびDepartment of Informationの独立二部とから成り、Division of StudiesにはFaith and Order, Church and Society, Missionary StudiesおよびEvangelismの四部があり、Division of Ecumenical ActionはLaity, Youth, Cooperation of Men Women in Church and SocietyおよびEcumenical Instituteの四部を擁して、夫々活発な活動を展開することとなった。

この時の決議にもとづいて、6年に1度の総会を開催されることとなったのであるが、実際に開催されたのは、冒頭に記した如く、エバンストン、ニュー

・デリー、ウプサラ、ナイロビ、バンクーバーと7年毎に開催されてきた。

その間、当初あれだけ冷淡な態度をとったローマ・カトリック教会も、第二バチカン公会議を境いとして、積極的な関心を示すようになり、全国各地域におけるキリスト教活動とも積極的な参与を見るようになってきた。<sup>(18)</sup>

さて、バンクーバーにおける世界教会協議会の第六回総回は、地もとの人々をも含めた15,000人の会衆を集めた開会式典・礼拝をもって始められた。

アムステルダム以来、回を追うごとに参加教会の数も、代議員や参加者の数も増大し続ける傾向にあったものの、アムステルダムでは44ヶ国147教会から議決権を有する代表者351名が参加しておったことから考えるならば、900名の議決権を有する代議員、1,000の議決権をもたない代議員のほかにアドバイザー、スチュワード、オブザーバー等々、青年代表300名をも加えて、実に5,000人を擁する大会議となり、世界中に4億人の信徒をもつWCC傘下の諸教会の勢力を十分に覗かしめるものであった。

今回のバンクーバー総会においては、最近の平和運動や社会運動において密接に協力し合っているローマ・カトリック教会からの正式参加はなかったものの、数多くのオブザーバーが派遣され、又、教皇ヨハネ・パウロⅡ世からメッセージが送られ、ローマ・カトリック教会バンクーバー大司教ジェームズ・カーネー師によって代読された。その要旨は、

「主イエスの恵みが、あなたがたと共にあるように。」<sup>(19)</sup>とのパウロの言葉で始まり、総会出席者に対して、祈のうちに深い司牧的関心と親密さを私が抱いていることを確信するよう呼びかけ、このバンクーバーの総会が、その主題を「イエス・キリスト世界の命」としたことに感謝の意を表明。次いで、エキュメニカルな努力は、キリストにある祈りが「彼らも一つになる」<sup>(20)</sup>ことを成就し、そのことを今日のキリスト者が願っていることを証しすることである。しかしこのさし迫った課題は、多くの困難になお直面しており、挑戦的であり、多面的である。それは神の意への服従と神の愛との共働を要求する。

わたしはこれまでよく世界各地のカトリック教会の司牧上訪問をしてきたが、WCC加盟諸教会の代表者たちと出会ったことは、特別の喜びであった。また多くの方々は、対話の努力と相互理解のためにローマを訪ねてくださっ

た。こうした接触は、キリスト教の一致への道を進めてきた。今日このバンクーバーの地における集会は、わたしたちすべてが願う目標への進展をもたらすことを信ずる<sup>(21)</sup>と述べ、「わたしの愛が、キリスト・イエスにあって、あなたがた一同と共にあるように。」<sup>(22)</sup>とのパウロの言葉で終る力強いものであった。

しかしながら、この教皇ヨハネ・パウロⅡ世のメッセージは、最近の同教皇の精力的な平和と教会一致をめざしての活躍と共に、ローマ・カトリック教会のエキュメニカル・ムーブメントに対する姿勢を明確にするものであって、当然のことながら、バンクーバー総会の喜んで受諾するものであったし、この総会の従来<sup>(23)</sup>の総会とは、その趣きを異にする一つの特色ともなったのである。

又、このバンクーバー総会において、従来<sup>(23)</sup>のものとは大きく異った点としては次の諸点が挙げられる。第一は、900名の正式代議員の中の31%が婦人であり、又、代議員の48%が信徒であったことも今大回の顕著な特色とされることである。信徒代議員や女性代議員の数の増大は、この総会が回を重ねるごとに顕著になってきたのであるが、今回は、特に開会礼拝の説教者に選ばれたポーリン・ウェブ副議長<sup>(23)</sup>が女性であったこともあって、特にその印象が強かったところもあるが、これもアムステルダム以来、Department of Cooperation of Men Women in Church and Societyを中心にその活動を推進してきた成果であるとも云うことができるだろう。

今次総会の第二の特長としてあげられることは、礼拝を中軸にして、全ての参加者たちが、「イエス・キリスト—世界のいのち」という総会主題の言葉の意味するところを、それぞれ自らの体験として感じとっていた、という印象の強かった点であろう。前回ナイロビで総会が開催されてからの7年間の世界の情勢は、各地に血腥い出来事が頻発して、世界の平和に大きな脅威を及ぼすものであった。総主事フィリップ・ポッター<sup>(24)</sup>は開会冒頭の挨拶の中で次の如く述べている。

「35年前の1954年、合衆国イリノイ州エバンストンにおいて、『イエス・キリスト—世界の希望』を主題として開催されて以来、北米大陸でこの総会が開催されるのは、今回が二度目である。当時、私たちは、東西両陣営の対決状況のさなかにおいて、さらには又、世界をとりまく政治的、経済的、人種

的な公正をもとめる人々の戦いのさなかにおいて、あの第二回総会のために参集したのであった。当時は、あのマッカーシーの魔女狩り旋風が合衆国内に吹き荒れていた時代でもあって、その影響が当時の総会にも及んだのであるが、それにも拘らず、私たちは、主のメッセージにあって、ともに言明することができたのである。『私たちは、此所(神の審判のもと死の蔭の中)に立っており、主イエスもまた私たちと共に立ち給う。彼は、まことに神であり同時にまたまことに人であり、私たちをさがしもとめ、私たちを救うために、私たちのもとに來り給う。私たちは神の敵であるにもかかわらず、キリストは私どものために死に給うた。私たちは彼を十字架につけて殺したが、神は彼を死人の中から甦らせ給うた。彼は、罪と死の力に克ち給うた。新しい生命が始まった。そして彼の甦りと昇天の力において、一つの新しい共同体をこの世に遣り込み給うたのである。この共同体こそ、彼の靈によって結び合わされ、彼の神から授けられた生命にあずかりつつ、彼を全世界に知らせる任務を与えられた集団である。』<sup>(25)</sup>という、これらの言葉は今でも適切な意味をもっているのであって、殆んど30年を経た今日、私たちは同様の主題、『イエス・キリスト—世界のいのち』のもとに集っているのである。私達は、キリストにあって神の生命にあづかり、その生命を世界の人々に捧げるものとして、今バンクーバーに集ってきている。エバンストン総会の時と比べて、私たちは今、全世界から遥かに多くの人々の代表が参集している。私たちは、かつての総会と同じように、今回もまた脅怖と絶望のもとに集っている。東と西、北と南の対決や、国々の内部における性、人種、階級ならびに宗教の間の軋轢とは従来にまして遥かに激しさと複雑さとを増してきている。人類の生存そのものが日毎に脅かされているのである。』<sup>(26)</sup>

このような、今日の暗い世界の状況については、「他者の苦難を分ち担いつつ一致に向って進もう」と訴えたポーリン・ウェップ女史の開会説教の中でも述べられていた。

「8年前、私たちが教会協議会の総会で顔を合わせてから後、スウエートの街路で、ベイルートのキャンプで、あるいは、アフガニスタンの山中において、又、南大西洋上において、北方諸島における爆弾の炸裂によって、はたまた、中央アメリカにおける大虐殺において、私たちは、流血の惨禍を眺めてきま

した。世界中いたるところで、人口は、人間の生命があたかも権力政治のゲーム処理をするカウンターであるかのように、流血の狂気に陥っているかのように思われます。あらゆる狂気の中の最も喧騒なものは、国家間の平和が恐怖の均衡を保つことによって維持できるという信念でありますし、軍国主義が適当な交渉の条件として、何百万人も神の子たちの大量殺戮と、神の創造の広大な地域の破壊とに直面されることができるといふ信念であります。そして、キリスト教会と雖も、この血まみれの混乱の唯中において清潔な手を保ち得ることはありません。」と。<sup>(27)</sup>

今日の複雑な世界情勢と緊迫した地域的な政治、経済、階級、宗教といった諸問題の中において、教会がこうした市井の生活から隔絶して孤高を保つことは有り得ないことである。否、むしろ、そのような混乱した世の真只中において、人々とそ苦難を共に分ち担うことによつてのみ、教会は本来の使命を全うすることが可能になるのである。それ故にこそ、ウェッブ女史の列挙したウガンダのルウム大主教、エルサルバドルのロメロ大主教あるいはエジプトのサムエル主教たちの名が、公正を求める戦いと和解の奉仕との中において抑圧された貧しい人々のために与えられた犠牲の血として、イエス・キリストの死と甦りに連るものとして、記念されるのである。

したがって、このバンクーバーの総会においては、軍拡競争、核兵器の脅威等々の重くのしかかる世界の情勢の中において、却って、「イエス・キリスト—世界のいのち」を身をもって信仰告白しようとするキリスト者たちの意識が昂まり、参加した人々は、公式代議員も参列者もともに、平和と一致への希望を強く感ぜしめられたのである。就中、この大会が、終始礼拝を中心として進められたこと、それぞれの礼拝が、いずれも周到な配慮と準備とをもって執行されたことによつて、参加したすべての人たちが、礼拝において私たちは一つであることを確認し合うことができたことは、従来の総会に比べて、最も大きな特長であった。

今次総会においては、全体会議の会場にあてられた体育館とは別に、巨大な天幕礼拝場を設営して、開会礼拝、大聖餐礼拝、ヒロシマを記念する8・6平和日徹夜礼拝、会期中の毎朝、毎晩の礼拝、そして閉会礼拝を、ここで行うこととしたことは、参加者たちをして、神の前にもともに脆くことを通して一致の

祈りを捧げるうえにおいて、大いなる希望と共に迎えられた。そして、そこにこそ、あの1910年のエデンバラで国際宣教会議以来から数えても、70年もの長い年月にわたって、待ち望まれた礼拝の一致の一大ステップが踏み出されたことを意味するものが存在するからである。

## Ⅱ 礼拝の一致

礼拝は、主教マイケル・マーシャルの指摘、Worship is the gospel in action. There are sings today that people are returning to christian life and commitment,<sup>(28)</sup>をまつまでもなく、信仰者が自己の行動によって表明する信仰告白であり、キリスト教徒にとっては、イエス・キリストの福音に参画する行為の第一歩である。したがって、礼拝は、独り瞑想に耽ったり、密室の祈りを捧げたりするものと異って、多くの人々の共同参画によってなされる公同的なものであり、同時に、普遍性を有するものであるから公禱と称せられる所以である。したがって信仰を同じくする者たちの捧げる礼拝は、自ら彼らの間に共通の形を整えることとなるし、その同じ礼拝の形をもって行なわれる礼拝が、時とところを異にするものであっても、相互に相通じ合うものと考えられてきた。ローマ・カトリック教会においても、アングリカン・コムニオンにおいても、又、その他のプロテスタント教会においても、それぞれの教会の礼拝を公同のものとして執行しながらも、互いに他教会、他教派の礼拝に参画することを認めないという誤った慣習が存在していた。このような弊風は、宗教改革以来、互いに袂を分けて離れて行った教会相互の不信や敵意が、神学上の意見の相違と双乗して造り出されたものでありながらも、長い年月と、その間の数々の歴史的な出来事の積み重なりによって、一朝一夕には氷解し得ないものとなっていたことも事実である。殊に、宗教改革の始まるずっと以前から、教会が異端と断じて極刑に処した者達を、分れて出てきた群れの中では殉教者として崇拜し、又、一方が異端とする教説が、他方においては、それこそ正統教理であると主張し、政治権力や国家権力を背景として血を血で洗う相剋を繰返した歴史的経過を辿っただけに、分裂したこれらの諸教会が、一つの主題のもとに集り、ともにその責任を分ち担おうとする意志の強さを覗かしめるものである。



バンクーバーにおいては、会議場とは別に礼拝の場を設けて会期中のあらゆる礼拝を、参加者たちが一致して参加し得るものとして設営されていた。したがって、総会において、あるいは分科会において、激しく論争し合った者たちも、論争のかけひきに嫌悪の感情すら抱かしめられた傍聴者たちも、共に、礼拝に参加することによって、一つに結び合わされている現実<sup>(29)</sup>に眼を向けることができたのである。バンクーバーでは、その礼拝において、ユーカリスト（聖餐）をもとにすることが行なわれたのである。

過去の世界教会協議会の総会において、開会礼拝、閉会礼拝、あるいは、祈祷の集りを共にすることはあっても、会期中の主日礼拝は、出席代議員や参加者たちが夫々自分の所属する教会・教派に属する地もとの教会に出席したり、各教会・教派毎に開催される礼拝に出席する、という形で執行されていた。エキュメニカルな会合において、ユーカリストをとともにすることができないという事実は、この運動が始まった当初からの最も重要な課題であって、インター・コムニオン（合同陪餐）の可否に関わる論議は、Faith and Orderのようなエキュメニカルな研究の場においても、又、個々の教会・教派の内部においても、真剣な研究討議を積み上げてきたところであった。筆者が取扱ったアングリカン教会の他教会との交りに関する論文では、このインター・コムニオンに関する論議が、ランベス綱領を定めるにいたった時期から、すでにアングリカン教会の神学者たちによって熱心に論議されていたことに言及している<sup>(29)</sup>。したがって、ランベス綱領がアングリカン教会のエキュメニカル・ムーブメントにおける一つの基本的な立場として考えられるようになった1880年代から数えるならば、殆んど1世紀にも亘って模索しつづけたところであるから、遂に、その実現に立ち合い、共同の礼拝に参加した人々の感慨はひとしおのものがあつたことは推察にあまりある。とりわけ、今大会における礼拝の一致をめざした準備が、ローマ・カトリック教会をも含めて、すべてのキリスト教会の祈りと協力のうちに進められたものであるだけに、その反響が一層大きなものと感じられたのかも知れない。

この礼拝でも、又、Faith and Orderの部門においても、リマ典<sup>(30)</sup>礼と呼ばれる洗礼とユーカリストとミニストリーに関する提案が論議されたのであるが、ここでは、ユーカリストの問題について観察することから始め、洗礼およびミニ

ストーリーに関しては別の機会に委ねることとしたい。

### Ⅲ ユーカリストの典礼

世界教会協議会の信仰と職制委員会が、この洗礼、ユーカリスト、ミニストリーの典礼に関する報告を発表した時、次の文を付記して、この報告が、あらゆるキリストの教会の神学者たちによって、数十年の研究討議をつくして合意に達したものであることを述べており、それまでの関係者たちの辛苦と努力がいま結実したのだという喜悦の気持ちをあらわに示していた。

いまここに公刊された報告書は、エキュメニカル・ムーブメントの長い旅路における大きな前進を記録するものである。50年にわたる研究と協議の結果であるこの洗礼、ユーカリストおよびミニストリーに関する典礼式文は、聖霊の導きのもとにすすめられた数十年もの対話を通して達成させた神学的な意見の一致を表明するものである。1982年1月、100名を超す神学者たちがペルーのリマに集まり、この合意に達した報告書—リマ典礼式文を、諸教会の共同研究と公式の応答を求めるために発送することを、満場一致で推挙することにした。これらの神学者たちは、事実上すべての大きな教会の伝統：イースタン・オーソドックス教会、オリエンタル・オーソドックス教会、ローマ・カトリック教会、オールド・カトリック教会、ルーテル教会、アングリカン教会、改革派教会、メソジスト教会、合同教会、デサイプル教会、バプテスト教会、アドベンティスト教会、およびペンテコステ教会を代表する人たちであった。

この同意報告書に対する諸教会の応答は、“受け入れ”に関するエキュメニカル・ムーブメントの過程のなかで、死活を制する一段階となるだろう。<sup>(31)</sup>

この報告書の中に盛りこまれた典礼を承認するか否かの応答は、それぞれの教会、教派の内部的決断として、夫々の教会ごとに自らの態度決定することが期待されており、筆者の属する日本聖公会もまたアングリカン教会の一管区として自らの意志を明らかにするための神学的な検討を開始したのである。けれども、他方においては、エキュメニカルな会合、研究会、あるいは教会間の合同委員会や協議会等々の場における礼拝と研究の両面で積極的にこの式文を用

いることが懸念されている。したがって、各教会がそれぞれ自らの態度を明確にしていない段階ではあったけれども、バンクーバーにおける礼拝に際してこの式文を試用することとしたのも首肯し得るのである。もとよりバンクーバーの総会期間中の試用を首肯し得るものとするわれわれと雖も、何事にでも教条的な頑なさや独善的な伝統主義とをもって反対意見を述べる人たちの在ることを忘却するものではない。むしろ、これらの反対意見を抱く人々との間に真剣な討論と協議を経て、共通理解と共同参加を導き出されることが必要であり、エキュメニカル・ムーブメントに携る者たちの心掛けた点であって、われわれもまた自戒するところである。そうした意味において、討論、協議を深めるためにも、以下ユーカリストの部分のみではあるが、私訳をもって、紹介することから始めよう。

#### IV ユーカリストについて（リマ・テキストによる）

##### 1) ユーカリストの制定

1. 教会は主からの賜物としてユーカリストを受領した。聖パウロは書いている。「わたしは、主から受けたことを、また、あなたがたに伝えたのである。すなわち、主イエスは、渡される夜、パンをとり、感謝してこれをさき、そして言われた、『これはあなたがたのための、わたしのからだである。わたしの記念 (ἀνάμνησις) に、これを行いなさい。』食事ののち、杯を同じようにして言われた、『この杯は、わたしの血による新しい契約である。飲むたびにわたしの記念として、このように行いなさい。』(1 Cor. 11 : 23-25 ; cf Mt. 26 : 26-29, Mk 14 : 22-25, Lk. : 22 : 14-20)<sup>(32)</sup>

イエスが、その地上における牧会活動の間に分ち与えられたものとして記録されている食事は、神の国の到来を宣言し、演出するものであって、群衆を養うことがそのしるしである。この最後の晩餐において、神の国の交りはイエスの苦難が切迫していることと連結させられているのである。彼の甦りの後においては、主はパンをさくことの中で、ご自身の存在を弟子達にお知らせになった。このようにユーカリストは、イエスの地上の生涯の間における食事と甦りの後の食事とを常に神の国のしるしとして連続させる。キリス

ト者たちは、奴隷の国からイスラエルを解放した過越節の記念の中と、シナイ山の契約の食事の中とにおいて (Ex, 24) ユーカリストの予表が示されていると見る。それは、キリストがご自身の死と甦りの記念として、小羊の婚宴 (黙示録19: 9) の予想として、弟子たちにお与えになった。教会の新しい過越の祝いの食事であり、新しい契約の食事である。キリストは、弟子たちに対して、ご自身の帰還まで神の継続的な民として、 sacramental な食事の中で、ご自身を記念し、またご自身と出会うことをお命じになった。イエスによって執行された最後の晩餐は、象徴的な言葉と行為を用いた礼拝形式の食事である。したがって、ユーカリストは、眼に見えるしるしによって私たちがイエス・キリストにおける神の愛、すなわちイエスが「最後まで」自分のものたちを愛された愛 (ヨハネによる福音書13: 1) へと結び合わせる sacramental な食事である。それは多くの名称を獲得したのである: 例えば、主の晩餐、パンをさくこと、聖餐、神の礼拝式、ミサ。その執行は、教会の礼拝の中心的な行為として継続されているのである。

## II) ユーカリストの意味

2. ユーカリストは、神がキリストにあって聖霊の力によって私たちのためにお造りになった、賜物の sacrament である。すべてのキリスト者は、聖餐を通じて、キリストの体と血にあってこの救いの賜物を受けるのである。ユーカリストの食事の中で、パンとブドウ酒を飲み食いする中で、キリストはご自身との交りをお与えになる。キリストの体に生命を与えながら、そして、それぞれのメンバーたちを更新させながら、神ご自身が行動なさる。キリストの約束にしたがって、キリストの体に受洗したそれぞれのメンバーは、ユーカリストの中で、罪の赦しの保証 (Mt. 26: 28) と、永遠の生命の誓約 (John 6:51-58) を受取るのである。ユーカリストは、本質的には一つの完成した行為であるけれども、ここでは次のような局面、すなわち、父なる神への感謝、キリストの記念、聖霊の祈願、信徒の交り、神の国の食事、という局面のもとで考察される。

### A. 父なる神への感謝としてのユーカリスト

3. 常に言葉と sacrament の両方を含んでいるユーカリストは、神の働き  
の言明であり、又、執行である。それは、創造、贖罪、聖化において完成さ

れたあらゆることの故に、人間の罪にも拘らず教会とこの世において今神が完成し給うたあらゆることの故に、神の国達成のために神が完成し給うであろうあらゆることの故に、父なる神に対して捧げる大いなる感謝である。このようにユーカリストは、それによって教会があらゆる神の恩恵に対する感謝を表わす謝恩の祈りである。

4. ユーカリストは、教会がそれによって全創造の代りに語るところの讚美の大きなささげものである。というのは、神が和解し給うた世界がそれぞれのユーカリストにおいて捧げられるのである。パンとブドウ酒の中で、信徒の人格の中で、彼らが彼ら自身のためにまたすべての人々のため捧げる祈りの中で、キリストはご自身の中に信徒を一致させ、ご自身のとりなしの祈りの中に含め給うのであるから、信徒たちは形を変え、彼らの祈りは聞き入れられるのである。この讚美のささげものは、キリストを通して、キリストと共に、キリストにおいてのみ可能である。パンとブドウ酒、地の果物と人間労働の果物は、信仰と感謝のうちに父なる神に捧げられる。ユーカリストはこのように来らんとする世界について、創造主に対する供え物と讚美の歌キリストの体における世界的な交り、聖霊による正義と愛と平和の国について示すのである。

B. キリストの記念、又は記念物としてのユーカリスト

5. ユーカリストは、十字架に死に甦り給うたキリストの記念であり、それは、すべての人のために唯一度限り十字架の上で成し遂げ、しかも今なお全人類に代って果しつつあるイエスの犠牲の生き生きとして効果的なしるしである。ユーカリストに適用するときの記念に関係する聖書的な概念は、それが神の人々によって礼拝の中で執行される時神の働らきの現在の効力を留意させるのである。

6. 私たちとすべての創造（キリストの受肉降生、しもべのつとめ、ミニストリー、教え、苦難、犠牲、甦り、昇天および聖霊降臨における）のために達成し給うたすべてのものと共に、キリストご自身が、私たちにご自身との交りを許しつつ、この記念の中に現存し給うのである。ユーカリストは、又、キリストの到来と究極的な神の国とを前もって味うことでもある。

7. キリストが、その中で、教会の喜びに溢れる執行を通して働らき給う追

憶は、このように表現と予想の両方である。それは過去のものや意味するものを心に呼びおこすだけのものではない。それは、神の力強い行為と約束についての教会の効果的な宣言である。

8. 表現と予想とは、感謝の祈りととりなしの祈りの中において表明される。教会は、贖罪の力強い神の行為を感謝のうちに思いおこしつつ、すべての人間に対してこれらの行為の恩恵を与えてくださるよう神に懇願するのである。感謝の祈りととりなしの祈りの中で、教会は、御子と、大祭司と仲裁者として（Rom. 8: 34, Heb, 7: 25）, 共に結び合わすのである。ユーカリストは、私たちのためのとりなしをするためにかつてこの世に住み給うたキリストの独特の犠牲の sacrament である。それは、神がこの世の救いのために為し給うたすべてのことの記念である。キリストの受肉降世、生涯、死、甦りおよび昇天の中で、神の意志が達成しようとしたところのものを、神は繰返し行うことはなさない。これらの出来事は独特のものであって、繰返すこともできないし、長びかせることもできない。しかしながら、ユーカリストの記念の中で、教会は、私たちの大祭司であるキリストとの交りのうちに、そのとりなしの祈りを捧げるのである。

注解（8）カトリック神学における“なだめの供えもの”としてのユーカリストについての参照文は、とりなしの祈りとしてのユーカリストの意味に照らして理解されることだろう。その理解というのは、唯一つの罪の償いが存在しておいて、十字架のユニークな犠牲についての理解が、実際には、ユーカリストの中で行なわれるし、また、すべての人のためになされるキリストと教会のとりなしの祈りのなかで父の前に捧げられるという理解である。

記念についての聖書的概念に照らして、すべての教会が「犠牲」についてのむかしからの論争を再調査しようと思うだろうし、また、なぜ自分たちの教会の伝承よりも他の教会の伝承が用られたり、用いられなかったりしたのかという理由についての理解を深めようとするにちがいない。

9. キリストの記念は、すべてのキリスト教の祈りの基本にして、また、源泉である。したがって私たちの祈りは、甦り給うた主のひき続いてなされるとりなしの祈りに依存したり、結びついたりするのである。

ユーカリストのなかで、キリストは私たちを彼の意志を喜びにみちあふれ

つつ自由に達成しようとする罪をゆるされた罪人として、キリストとともに生き、キリストともに苦しみ、キリストを通して祈ることができるようにしてくださいるのである。

10. キリストにあって、私たちは、私たちの日常生活のなかで、私たち自身を生きた聖なる供えものとして捧げるのである (Rom. 12: 1, 2: 5)。神のお喜びになるこの霊的な礼拝は、そのなかで私たちがこの世における和解のしもべとなるために、愛のうちに聖化されて和解させられるところのユーカリストにおいて内容豊かなものとされるのである。

11. 私たちの主と結ばれ、すべての聖者や殉教者たちとの交りにあって、キリストの血によって調印された契約において、私は新しいものとされるのである。

12. キリストの記念は、ユーカリストの食事そのものについて説教された言葉の正しい内容であるから、それぞれの言葉が他のものを互いに補強し合うのである。

13. ユーカリスト制定にあたってのキリストの言葉と行為は、執行の真只中に立っているのである。ユーカリストの食事は、キリストの体と血のサクラメントであり、彼の真の臨在のサクラメントである。キリストは、ご自身のものとともにいるという約束を、さまざまな方法で、世の終りに至るまでも達成し給うのである。しかし、ユーカリストにおけるキリストの臨在の方式は独特のものである。イエスはユーカリストのパンとブドウ酒に関して云い給うた。「これはわたしの体である・・・これはわたしの血である。」と。キリストが宣言し給うたことは真実である。また、この真理は、ユーカリストが執行される度毎に達成されるのである。教会は、ユーカリストにおける、キリストの真の生きた行動的な臨在を告白する。ユーカリストにおけるキリストの真の臨在が、各個人の信仰に依存することはないのだけれども、キリストの体と血を認識するための信仰が必要であるということは、誰もが承認することである。

注解13. 多くの教会は、イエスの言葉によって、又、聖霊の力によって、ユーカリストのパンとブドウ酒が不思議なことではあるけれども実際に甦りのキリストの体と血になるのだ、ということ、すなわち、ご自身が達成し給

うすべてのことがらのなかにキリストが在し給うのだということを信ずるのである。パンとブドー酒のしるしのもとにおいてもっとも深い現実、私たちが養い、かつ私たちの全存在を変えるために私たちのところへきてくださるキリストの全体的な存在である。他の幾つかの教会では、ユーカリストにおけるキリストの真の実在を確認しつつも、パンとブドー酒のしるしと臨在とがそれ程明確には結びつきはしない。この相違が聖書の言葉そのものを形成する集中点の中に収容されることができかどうかという決定は、教会のために保留されている。

14. 聖霊は、十字架につけられて甦りたまうたキリストを、制定の言葉のなかに含まれる約束を達成しながら、私たちのために、ユーカリストの食事のなかで真実に臨在し給うのである。キリストの現在は、ユーカリストの中心において明確であるし、また、制定の言葉のなかに含まれている約束は、それゆえに執行にとって基本的なものである。しかしながら、父なる神が、ユーカリストの本来の起源であり、究極的な達成でもあり給う。神によって、また、神にあって、神の子の受肉隆世が、その生きている中心である。聖霊はそれを可能にし、かつ、それを効果的なものとしてゆく、測り知れない愛の力である。ユーカリストの執行と三位一体の神の秘義とを結びあわせる絆は、歴史的なイエスの言葉を現存させ、かつ、生きたものとさせる聖霊の役割を啓示するのである。それが答えられるのだ、という制定の言葉のうちにあるイエスの約束によって保障されながら、教会は、ユーカリストの出来事が本当に現実のものとなり、その生命をすべての人のために与えつつある十字架につけられて生きかえったキリストが実在し給うようにと、聖霊の賜物を求めて父なる神に祈るのである。

注解(14) これはキリストのユーカリストの臨在を霊的なものにするためではなくて、み子と聖霊の間の永続的な結合を確言するためである。この結合は、ユーカリストが魔術的な行為でも機械的な行為でもなくて、教会の全面的な依存を強調するところの父なる神にむかって述べられた祈りであるということをも明白にするのである。キリストの約束である制定の言葉と、礼拝において聖霊の助けを求める祈りともいうべき聖霊降臨祈願の言葉の間には、本質的な関係が存在している。制定の言葉についての関係のなかでなされる



聖霊降臨祈願は、いろいろな礼拝の伝統のなかで、互いに異った風に位置を定めたのである。初期の礼拝式文において、“祈祷行為”の全体がキリストによって約束された実在をもたらすものとして考えられていた。聖霊の助けを求める祈りは、会衆とパンとブドウ酒という要素にも、両方に対してなされるのである。このような理解の回復は、聖別の特別な瞬間に関する困難さにうち克つことを助けるだろう。

15. パンとブドウ酒が、キリストの体と血というサクラメンタルなしるしになるのは、キリストの生きた言葉と聖霊の力とによるものである。これらのものは聖餐拝受の目的のために、そのように残るのである。

注解(15) 教会の歴史のなかには、ユーカリストにおけるキリストの真実にして独自の臨在の秘義を理解しようとする、いろいろな試みが存在し続けた。あるものたちは、それを説明しようと模索することもなしに、単にこの臨在について確言することで満足していた。他のものたちは、その結果としてもはや通常のパンとブドウ酒というものは存在しなくなってキリストの体と血が存在しているという、キリストの言葉と聖霊の働らきによってもたらされた変化について主張する必要があると考えた。更にまた他の人たちは、それを偏らせるような解釈から保護することを求めて、その秘義の意味を研究しつくそうと主張することはしないけれども、真実の臨在についての解説を発展させたのである。

16. ユーカリストの行為全体が、聖霊の働らきに依存しているので、聖霊降臨の祈りの性格をもつものである。礼拝の言葉のなかで、ユーカリストのこの局面は、変形してしまった表現を見いだすのである。

17. 新らしい契約の共同体としての教会は、それが聖化され、革新されるように、聖霊がすべてのものを正義と真理と一致へ導き入れ、この世に対するその使命を達成する権能を与えてくれるよう、確信をもって祈るのである。

18. 聖霊は、ユーカリストを通して神の国を前もって味うことを可能にするのであって、それによって、教会は、新らしい創造の生命と主のもとに帰る事の保障とを受けとるのである。

D. 信仰者の交りとしてのユーカリスト

19. 教会の生命を豊かに養ってくださるキリストとの交りであるユーカリ

ストは、同時にまた、キリストの体である教会内における交りである。一つの与えられた場所において一つのパンを分けあうことと共通の杯とは、あらゆる時と所とにおいて、分ち合っている人たちが、キリストと分ち合いの他の仲間たちとの一体性を誇示し、効果あらしめるのである。神の民の共同体が十分に表示されるのは、ユーカリストのなかにおいてである。ユーカリストの執行は常に教会全体と関係があるのであって、教会全体がそれぞれの地方的なユーカリストの執行と関わりあいになるのである。一つの教会が全教会の表示であるべきだと主張する限りにおいては、他の教会の興味と関心を慎重にとり扱う方法のため、それ自体の生命に対して命令するために注意を払うだろう。

注解(19)最も初期の時代以来、洗礼は、それによって信者たちがキリストの体に結び合わされ、かつ聖霊を授けられるための sacrament であると理解されてきた。一つの教会のなかで、ユーカリストに参加する受洗信徒とユーカリスト執行の司式をする牧師との権利が、他のユーカリストを行う集会を司式する牧師やそれに参加する信徒たちによって異義を唱えられている間は、ユーカリストの普遍性が少ししか表わされないのである。今日では、主の晩餐の陪餐者として、洗礼を受けた幼児たちの包含が多くの教会において討論されている。

20. ユーカリストは人生のあらゆる面を包括している。それは全世界のための感謝と供え物とを表わす行為である。ユーカリスト執行は、一つの神の家族のなかの兄弟姉妹と見なされているすべての人々の和解と責任分担とを要求する。ユーカリストの執行は、また、社会的、経済的、政治的生活における適切な関係を模索するなかでの不断の挑戦である (Mt. 5: 23f; 1 Cor. 10: 16f; 1 Cor. 11: 20-22; Gal. 3: 28)。私たちがキリストの体と血を分ち合うとき、あらゆる種類の不公平、人権差別、分離、自由の欠除が激しく挑戦を受けるのである。ユーカリストを通して、すべてのものを革新させる神の恵みが浸透して、人間の人格と尊厳を恢復するのである。ユーカリストは、世界の歴史の中心的な出来事のたかに信仰者を巻きこむのである。それは故、ユーカリストに参加するものとして、私たちが、進行しつつある世界の状況や人間の境遇改善の動きに積極的に参画しないのであれば、私たちが

矛盾していることを立証することになるのである。人間の傲慢とか、物質的な利害とか、政治権力とかのために生ずる様々の分裂、とりわけ道理に合わない信仰告白上の対立による頑固さという、私たちの社会のなかにあるあらゆる種類の不正な関係が持続することによって絶えず繰り返される審判のもとにおかれているのであって、ユーカリストは、人間の歴史のなかにおいて、和解させるために現臨し給うている神の面前で、私たちの態度が矛盾するものであることを私たちに見せつけるのである。

21. ユーカリストのなかでキリストの体と交ることによって作りあげられる連帯と、キリスト教徒たちがお互い固志と世界とにむかって注ぐ応答的な心くばりは、礼拝式のなかで、特殊な表現すなわち、罪の相互赦罪、平和のしるし、すべての人々のためのとりなしの祈り、一緒に飲み食いをするこゝと、病の床にある人々や監獄に囚われている人々のために要素（パンとブドウ酒という要素を頒けあうことやそのような人々とともにユーカリストを執行する、という特殊な表現を見出すのである。ユーカリストにおけるこれらの愛について表現は、キリストがしもべとしてご自身で証しし給い、このしもべとしての道にキリスト教徒たちが自分で参画するものと直接関係するのである。キリストにおける神が人間の状況のなかに入って来給うたのであるから、したがって、ユーカリストの礼拝式は男と女との具体的で特別な状態に近いのである。初期の教会においては、執事と女執事のミニストリーが、ユーカリストのこの面に対して一つの特別なやり方による言いまわしが与えられている。そのユーカリストの食卓と助けを必要としている人々との間に存在するこのようなミニストリーの場所が、この世界のなかで贖罪のためにキリストが臨在し給うことを正確に立証するのである。

#### E. 神の国の食事としてのユーカリスト

22. ユーカリストは、創造の究極的な革新として約束されてきた神の支配の幻が見えるように開放するものであるし、また、この神の支配をあらかじめ味わせるものである。この革新のしるしは、神の恵みがあらわされ、人間が正義と愛と平和のために働らくところが世界中どこにでも実在するのである。ユーカリストは、そのなかで教会がこれらのしるしの故に感謝をささげ、喜びのうちに執行し、キリストにあって到来する神の国のために前もって準

備をする祭りである（1 Cor. 11 : 26 ; Mt. 26 : 29）。

23. そのために革新が約束されている世界は、すべてユーカリスト執行のなかに現存するのである。世界は、教会がすべての創造のために語る父なる神への感謝の祈りの中に存在するし、大祭司と仲保者とを結びあわす教会が世界のために祈るキリストの記念のうちに存在するし、また、教会が聖化と新しい創造のために聖霊の賜物を求める祈りのなかに存在するのである。

24. ユーカリストのなかで和解させられてキリストの体のメンバーとなった人たちは、男と女のなかでの和解の召使いとなり、復活の喜びの証人となるように召集される。イエスが地上におけるミニストリーを果し給うている間に、取税人たちや罪人たちのもとに行って彼らと食卓の交りをもち給うたと同じように、キリスト者たちは、世界から見捨てられている人たちと連帯して、すべての人々のために生き、犠牲となり、今ではユーカリストのなかでご自身を与え給うキリストの愛を示すためのしるしとなるために、ユーカリストに参加するよう呼び集められるのである。

25. ユーカリストの真の執行は、世界に対する神の使命へ教会が参画する例証である。この参加は、福音の宣言と隣人への奉仕と世界における信仰深い存在という日常的な形をとるのである。

26. それが全く神の賜物であるが故に、ユーカリストは、キリスト者たちをご自身の効果的な証し人にならせるという新しい現実を、今日の時代のなかにもち込ませるのである。このユーカリストは、宣教師たちにとっての貴重な食物であり、巡礼者たちが使徒たちから托された宣教の旅路を辿って行く時に携える高価なパンとブドウ酒である。ユーカリストをとともにする共同体は、世界の救済のためにご自身の生命を与え給うた主イエス・キリストの言葉と行いによって信仰告白をすることで養われ、強くされたのである。唯一人の主の食事を分け合うことによって、ユーカリストにあづかる人々が一つの群れになるように、このユーカリストに連らなる人々は、キリストがその人のために死に給うた人をすべて、ご自身の祭りであるユーカリストにお招きになるのであるから、現在時点ではその眼に見える範囲を超えて存在する集団の人々に対しても関心を払わなければならない。キリスト者たちが同じ塊のパンから食べ、同じ杯から飲むために食卓を囲んで完全な交りを結ぶことが

できない限り、宣教の証しは、個人レベルと団体レベルの両方において弱められてしまうのである。

### Ⅲ ユーカリストの執行

27. ユーカリストの礼拝式文は、本質的には、順序変更と様々な重要性をともないながら、以下の要素をもって歴史的にできあがってきた一つの全体的にまとまったものである：

- 讚美の聖歌；
- 悔改めの行為；
- 赦罪の宣言；
- 様々の形での神の言葉の布告；
- 信仰の告白（信経）；
- 全教会と全世界のためのとりなしの祈り；
- パンとブドウ酒の準備；
- 贖罪と聖化（祝福についてのユダヤ教の伝承に由来する）<sup>(34)</sup> という創造の驚異のゆえに父なる神に対する感謝；
- 新約聖書にしたがったキリストの sacrament 制定の言葉；
- 教会を實在のものとならせた受難，死，甦り，昇天，ペンテコステという贖罪の偉大な行為についての記念または記念物；
- 会衆およびパンとブドウ酒という要素のうえに聖霊の降臨（エピクレシス）<sup>(35)</sup> をもとめる祈り，（制定の言葉の前であるか，記念のあとなのか，あるいは両方であるのか；あるいは，ユーカリストの“祈願”の性格について十分に云いあらわしている聖霊に関する他の言及）；
- 神に対する信仰者の聖別；
- 聖徒たちの交りについての言及
- 主の帰国と神の国の決定的な表示をもとめる祈り
- 全会衆のアーメン
- 主の祈り
- 和解と平和のサイン
- パンをさくこと
- キリストとの、また、教会のメンバーひとりひとりとの交りのうちに飲み食

いすること

—最後の讚美の行為

—祝福とおくり出し

28. ユーカリストの執行と聖餐拝受のなかで一致に向う最良の方法は、教えと礼拝式文に関して、異なる教会のユーカリストそのものの革新をはかることである。諸教会は、いま到達の過程をたどりつつあるユーカリストについての同意に照らして、自分の教会の礼拝式を検証すべきである。

礼拝改革運動は、主の晩餐を祝うやり方において互いに歩み寄ることをもたらした。しかしながら、私たちが共有するユーカリストの信仰と矛盾しない、ある一定の礼拝式のもつ多様性は、健全で豊かにする事実として認められている。ユーカリストについての共通の信仰の肯定は、礼拝式文かあるいはその実施のいずれかのなかでの一致を暗示はしないのである。

注解(28) 新約聖書の時代以来、教会は、イエスが最後の晩餐のときに使用し給うたパンとブドウ酒をユーカリストの要素として続けて使用してきたことに最大の重要性をおいている。パンとブドウ酒を用いる習慣がないところや、それらのものが手に入らないような世界のある地域においては、今日、日常生活のなかにユーカリストを定着させるためには、その地方の食物や飲物を用いた方がよいのである。さらに進んだ研究では、主の晩餐のどの特色が、イエスによって変ることのないように制定されたものであるのか、またどのような特色がそれを決定するための教会の権能のなかに残るのか、という問題に関係することを要求するのである。

29. キリストは、ユーカリストのなかで、教会を集め、教え、養い給うのである。食事に招き、その食事を主催し給うのはキリストである。彼は神の民を養う羊飼いであり、神の言葉を告知する予言者であり、神の秘義を執り行う祭司である。殆んど教会において、この職務は一人の聖職接手を受けた牧師によって示される。キリストの名によって行なわれるユーカリストの執行において司式するものは、この儀式が会衆自ら造り出したり所有したりするものではなくて、ユーカリストがご自身の教会のなかに生きてい給うキリストからの賜物として受領するものであることを明確に示すのである。ユーカリストの聖職者は神の主導性を代表し、普遍的な教会のなかで地方的な教会

の会衆が、他の地方の教会の会衆と結び合わされていることを云いあらはす神の代理人である。

30. キリスト教信仰は主の晩餐に依存している。この故に、ユーカリストは頻繁に執行されるべきである。神学、礼拝式文、および実施の多くの違いは、聖餐式が執行される頻度の相違に関係するのである。

31. ユーカリストはキリストの甦りを執り行うのであるから、キリストの甦りが、少くとも毎日曜日ごとに起るというのは適正なことである。それが神の民の新らしい sacramental な食事であるのだから、ひとりひとりのキリスト者が、聖餐をしばしば受けるように義務付けられねばならない。

32. ある教会では、聖別された要素のなかであってキリストの實在が執行した後にもまで継続すると主張する。他の教会では、執行の為そのものと陪餐行為のなかでの、要素の消費に最重点をおくのである。そのなかで、要素がとり扱われる方法に特別の注意がはらわれる。要素保存の実施については、それぞれの教会は他の教会の実施と敬虔さとを尊重しなければならない。諸教会の間での実施に際して多様性を与えることを同時に、次第に一点に収斂してゆく過程のなかの現在の時点で到達した状態に注意をすることは、云い出すだけの値打のあることである。

—一方においては、要素保存の主要目的が病人や欠席している人々に対する配布であるということを、特に説教と指導のなかで記憶されることであり、そして、

—地方においては、病人の陪餐のために用いられるものを除外することなしに消費されることによって、ユーカリスト執行に際して提供された要素に対する尊敬を示す最良の方法であることを承認するのである。

33. 現時点の声明のなかには、お互いの理解が次第に増し加わってきたことを云いあらわしているが、その深められた相互理解は、幾つかの教会が自分たちの間で広範囲にわたるユーカリストの交りを達成し、そうすることによって、キリストの分裂した民が主の食卓を囲んで、眼に見えるような状態で、再び結び合わされる「その日」に近づくことを許すであろう。

## V 当面の課題

キリストの体として形成された教会は、たとえ全世界にひろがろうとも、本来一つの共同体として、礼拝をともにし、生活をともにし、互いに他を扶助することによって、そのなかにキリストが臨在し給うことを証してきたのである。しかしながら、人間の歴史のなかにおける2,000年の教会の歩みは、かつて、S・C・ニール主教が指摘したように、まさしく分裂の歩みであったと云わなければならない。けれども、キリストの体としての全教会の一致をもとめることもまた、その時その時のキリスト者たちや教会の願いであったし、19世紀後半からのエキュメニカル・ムーブメントの展開とともに、一致に向う足どりは次第に力強いものとなってきており、「再び結び合わされる『その日』に近づきつつある」ことを思わしめるのである。

とりわけ、前に述べたように、エキュメニカル・ムーブメントのなかで最も難かしいものとされてきた礼拝の一致を目指した大いなる足跡が、今回のバンクーバーで開催された世界教会協議会の第六回総会において、力強く印されたことは、この運動にとってもまたそれに関係するものにとっても極めて喜ばしいものであったが、同時にまた、非常に大きな課題と責任とを投げかけるものであった。

すなわち、私たちがおかれている現状は、わずかに諸教会が一致を目指してともに歩みつつあることを確認しあうという状況であって、まだ、教会の一致が実現したのではないことを明確に把握しておかねばならない。なる程、バンクーバーでは、礼拝の一致をもとめてともに祈ることを中心として進められたのであるし、リマ・テキストそのものも、また、論義の中心として人々の関心を集めた。しかも、このリマ・テキストと呼ばれる典礼についての見解は、今後各教会が自らの見解を表明しなければならない共通の課題を提示するものでもあった。洗礼とユーカーリストとミニストリーは、いずれもイエスご自身の制定し給うたところである。けれども、それにも拘らず、教会の伝承のうちにある他の教会と相異なる神学と伝承とによって対立的な意見や現解のもとに執行されてきたのであって、本稿でとりあげたユーカーリストの問題に限ったとしても、当面以下のような問題が積極的に取組まれなければならないものとして存



在しているのである。

1. 私たちが本稿Ⅲで見てきたように、ユーカリストの制定においても、その執行においても、そこで用いられている言葉が、一つの教会のなかで用いられている意味と、他の教会で用いられる場合の意味との間に相異があってはならない。メディアとしての言葉は、共通の理解なり意味を伝えるものとして用いられるときに、始めてメディアとしての機能を果たすことが可能となる。そうであるならば、「記念」(ἀνάμνησις)の場合でも、地上の生活をともにし給うたイエスとその行動を、いま、ここで、「追憶」する意味に解するものと、いま、ここにおいて、私たちのこの交りのなかに臨在してし給うキリストが、ご自身の地上の生活と行動を、すべて贖罪のために必要な行為であったものとして、私たちの決断を迫る言葉とともに再現されるのだ、という意味での「記念」とは、その意味するものが根本的に異なるものである。したがって、そこには、聖書の光に照らして共通の理解をもつものとして言葉を使用することがなされなければならないということが問題として存在するのである。このことは、日本国内におけるローマ・カトリック教会とプロテスタント諸教会の間で協力して刊行された共同訳聖書の人名や訳語において顕著に見られたところである。

2. ユーカリストの呼び名が日本の諸教会の間でも定着しつつある。主の晩餐が、教会にキリストの臨在し給うことを証しする感謝の祭りとして、キリストの体と血を象徴するパンとブドウ酒を用いて執行される。キリスト教の礼拝の中心的な行為であるこの感謝の祭りは、聖餐または聖餐式として、使徒たちの時代から教会の中で定着してきたものであって、新約聖書のなかでも、教父たちの書物でも言及されている。そして、その呼称も、聖餐、主の晩餐、あるいはミサ聖祭など、教会の伝統によって異なるものを用いられてきたけれども、その意味するところは、いずれもパンとブドウ酒を要素としてキリストの体と血にあづかり、キリストの臨在にふれる感謝の祭りであることは、各教会で共通している。もとより、その神学的解釈や教えの相違はあったとしても、礼拝のなかのあの行為と共通にイメージすることのできるものを同じ言葉をもって表現することは必要である。ここにおいて、元来「感謝」または「感謝の祈り」や感謝の祭り」の意味が用いられた“εὐχαριστία”から“EUCCHARIST”，“ユー

カリスト”と呼ぶことが自然にお互いのうえに定着するようになった。エキュメニカルな会合や研究の場においてようやく定着してきたこの呼称は、それぞれの教会の信徒や会衆の間にまで浸透してゆくのにいまだ若干の時間を要するであろうが、教会の一致も礼拝の一致も、教会全体のものでなければならないのであって、それぞれの教会から派遣されて共同研究に従事する者たちや高位聖職者たちの同意のみで実現するものではないところから、それぞれの教会が時間と努力を費やしてでも、その浸透と教化をはからなければならないのである。

3. 本稿において述べたように、教会がそのなかであってミニストリーをはたしつつある現代社会と教会との関わりは、ユーカリストの執行においてより一層明確に示される。すなわち、本稿Ⅲ、20および21において指摘しているように、ユーカリストも、教会も、キリストの地上におけるミニストリーが、取税人や罪人たちのように、当時の社会にあって人々の交りの外に見捨てられたままの状態にある者たちを神の国に招くためのものであったことと積極的に関わることを要求される。ユーカリストが、来らんとする神の国の宴をあらかじめ味わわせるものであるならば、この地上におけるキリストのミニストリーと直接に関わりをもつものである。それは、今日の社会における戦争、饑餓、不正、不公平、あるいは、人権、男女等による社会的、政治的、経済的な差別等々によって苛酷な状況のなかにある人々の側に立って、教会が積極的に闘う姿勢をとるのか、あるいは、このような不義、不平等を押しつける権力の側に立つのか、という決断を迫られる場である。教会が政治権力や経済体制と結びつくことによって内面的な腐敗と随落の道をたどり、抑圧された者とともに自由と平等をもとめて闘うときに信仰的な活力に溢れるものとなることは、教会の歴史に照らして明らかである。したがって、ユーカリストの革新は、現代社会における教会そのものの革新をも要求するものである。

## む す び

世界教会協議会の第六回総会のもたらした意義は、今日の世界におけるキリストの体としての教会が果たすべき急務を明らかにしたところにある。そこで

語られ、祈り、模索されてきた教会の一致は、キリスト教会の願いであるけれども、教会自体のためのものではない。この世におけるキリストの証しの体として、教会が分裂したままでよいのか、という疑問は、すでにパウロによっても云われてきたところであるが、エキュメニカル・ムーブメントの初期の時代から当時者たちをこの運動に駆りたてた問題であった。すなわち、教会の一致によって、より強力なキリストの証しを担いうるのだ、という強い信仰に根ざしている。

礼拝を中心として展開されたバンクーバーの総会は、そこで討議されたことの実現に一層の時間と努力を要するとしても、全教会一致の予兆を眼に見える形で示した意義は大きい。しかし、それにもまして力強い証しとなったものは、今日の世界の情勢と、世界が抱えている深刻な諸問題の解決に対する積極果敢な発言と行動に関わる期待であったし、教会がそのような期待に答え得るものとして信頼を受けていることを示すものでもあったのだ。現在の世界における最大最重要な問題は、云うまでもなく戦争と平和の問題である。戦争は、貧困、饑餓、人種差別等々あらゆる諸悪の根源である。にもかかわらず、私たちの世界は、軍備競争、核配備、中東、中米等における戦火等々のさなかにあって、まさにデモクレスの剣のもとに坐している状態である。他方、ローマ教皇が平和と平等を実現するために世界中を飛びまわられている姿や、カトリック教会や世界教会協議会の各国政府に対する働きかけが、決して無意味なものではないことも認識されつつある。全世界のキリスト教会が一致して意見を述べ、行動をとるとするとき、そこには「キリストは世界の主」であることを信ずるキリストの体としての教会と、具体的には14億を超すとも云われるキリスト者が存在するのである。そしてこの教会は、この世の抑圧され、虐げられている人々を招かずには成立しない神の国の宴会の食卓にあづかるユーカリストを、教会そのものの生命の根源としているのである。したがって、バンクーバーの総会ならびに、今日のエキュメニカルな合意は、教会が現代社会のなかにあって、そのあるべき真の姿を明確にするための革新をもとめる点でも極めて大きな意義をもつものであったし、その革新は今後のそれぞれの教会の具体的な歩みのなかで証しされて行くことになる。(1983. 12. 1)

〔註〕

- (1) 1910年、エディンバラにおいて、International Missionaries Conferenceが開催されて以来、Faith and Orderの研究組織が回を重ねて来たこと、更に、International Missionaries Conference継続委員会やLife and Workの委員会が組織されて、1948年World Council of Churches (W. C. C.) が形成された後にも夫々の委員会の活動は続けられて来た。その中で、信仰、教理、礼拝、聖職位の問題に関してはMember Churchそれぞれの伝統や神学および慣習等の違いが障壁となっていて、その進展は遅々たるものであった。これに反して、Life and Workの委員会が直面し且つ取り組まねばならなかった問題は、失業、貧困、或いは戦争による被害の救済等に、直接現地の諸教会が協力して当らねばならなかったことから、随分早い時期から具体的な協力活動が展開されたのである。殊に第二次大戦後の人権問題、人種差別撤廃や反戦、平和の運動における協力活動には見るべきものがあり、拙論、「黒人差別の問題とキリスト教の立場」（1965年3月、「現代の理論3月号所掲」）において、いち早く指摘したところであり、最近のローマ教皇ヨハネ・パウロⅡ世の活躍がその最たる具体的な事例とも云えるのである。
- (2) 桃山学院大学キリスト教論集第19号、1983年3月所掲の拙論、エキュメニカル運動の新段階—アングリカン=ローマ・カトリック教会「合同声明」について—の中では、他の掲載論文との関係で所要ページ数を大巾に削減した為に舌足らずの感を抱きつつも、両教会の間の sacrament とミニストリーの問題についての「合意」に関して私見を述べたのである。
- (3) 国際宣教会議 (International Missionaries Conference. I. M. C. と略する) は、John R. Mott 博士の提唱によって、ローマ・カトリックを除くキリスト教会の宣教師たちが急激に変化する社会に即応する宣教戦略を模索するために、スコットランドのエディンバラにおいて開催され、時のカンタベリー大主教 Randall T. Davidson が The Appeal to all Christian People という題で開会礼拝の説教を行った。後に、継続委員会を組織し、1921年、国際宣教師協議会 (International Missionary Council) と称し、1928年エルサレム、1938年マドラスに於いて、大会を開催、1948年世界教会協議会 (World Council of Churches, W. C. C. と略す) 結成以後はその一部局として活動を継続してきた。
- (4) 全てのキリスト教会が、イエス・キリストを唯一の主と仰ぎつつもその告白する信仰の表現と表現の背後にある教理や神学は、たがいに袂を分けて以来の歴史的経過の中で互いに相容れることが困難なものとなってきた。例えば、一つの教会では幼児洗礼が妥当なものとして教会生活の中に深く根をおろしているのに、もう一つの教会では幼児洗礼を排し、信仰告白が明確な意志表明として受容られるためには成人洗礼のみを妥当とするといった状態でその他浸礼か滴礼かといった洗礼のみならず、聖餐における神学的理解の相違などが、十分な時間をかけて討議、研

究される必要があった。

- (5) 近年のエキュメニカルな会合や研究会で発表される文書に「ミニストリー」(ministry) という語が用いられるようになったが、久しい間order又はOrdnungの語が用いられ、聖職位又は職制と訳されていた。IMC参加教会の中でも、アングリカン教会やオーソドックス教会は主教、司祭、執事の職位を継承しておいて教会にとって不可欠のものと主張するのに対して、メソジスト教会の主教職は異った立場であるし、このような職制を有していない長老派や組合派等々の教会との間にこの聖職位の理解と継承をめぐる超えきれぬ意見の相違が見られたことは当然であった。
- (6) 1910年、エディンバラのIMC会議の際にフィリッピンから参加した米人主教 Charles Brentによって提唱され、1927年スイスのローザンヌ、1937年エディンバラ、1952年ルンドと会合を重ね、WCC結成後も継続的に会議を重ねた。
- (7) 1948年アムステルダムにおいてIMC. Faith and Order. Life and Workの夫々の研究並びに活動の積上げを土台としてWorld Council of Churchesの会合が開催された頃から“全世界”を意味するEcumenicalという語を用いるようになったが、第2次世界大戦迄はReunion Movementと呼ばれていたことから、この運動が、始めは教派に分裂して互いに他を顧みない状況から脱して、キリストの体としての教会の一致をはかろうとしたものであることを明確に覗い知られる。
- (8) Col. 1:18, 1:24
- (9) 通常リマ典礼、或いはリマ文書と呼ばれるが、1982年1月ペルーの首府リマに集った百人を超える神学者たちが参教会を代表して協議に加わり満場一致で採択した洗礼、聖餐、聖職位に関する同意文書にして、そこには、カトリックからプロテスタントの殆んど全てのキリスト教会の共通理解が示されている
- (10) 元来Reunion Movementとして分裂したキリスト教会の再一致をはかる運動は、1910年以来プロテスタント諸教会、正教会、アングリカン教会の間で進められて来たが、第二次世界大戦のために中断。この時は、全世界の教会の一致を目指すということで、準備が進められていたが、ローマ教会の不参加は、教会一致の前途が未だ遙かなものであることを痛感せしめたし、東方社会主義諸国からの代表が参加出来なかったことは、大戦前には協力しあった仲であっただけに、東西両陣営の緊張が、核保有をめぐる、第三次世界大戦を暗示するものとして全世界に脅威を与えていたのであるから、鉄のカーテンを超えての教会の一致は、この不参加という現実によって一層熱烈な祈りとなって行った。
- (11) プラハに本部を置くChristian Peace Conference、社会主義諸国のキリスト教会およびその信徒たちによる平和運動として発足した。その神学的背景は、遠く1925年のストックホルムにおけるLife and Workの会議と1927年ローザンヌにおいて開催されたFaith and Orderの会議とに触発されて1928年プラハで開催することになった「キリストにある平和の模索」にあるとされる。

- BP. Karoly Toth: Report of the General Secretary, Documents of the Vth All Christian Peace Assembly, Prague, June 22-27, 1978, p.124
- (12) Harold E. Fey, ed.: The Ecumenical Advance, A History of the Ecumenical Movement, Vol. 2. 1948-1968, London, SPCK, 1970, P.23-24
- (13) アングリカン教会の聖職位に関する咨問に答えるために、1890年代と1920年代の二期にわたって枢機卿ハリファックスが、ウエストミンスターズのベンソン主教と会談。  
最終的な両者の歩み寄りには得られなかったけれども、Malines Conversationの名称をもって、エキュメニカル・ムーブメントの歴史的な転回点となったものである。
- (14) 第二バチカン公会議の開催に力を尽し、エキュメニカル・ムーブメントに対するカトリック教会の接近策を打ち出した教皇ヨハネ23世は若い時からプロテスタント教会の聖職、信徒に多くの友人をもっていたし、チチェスター主教ジョージ・ベルも又、カトリックの友人を多くもっていた。ベルとヨハネ23世との交友も長かった。ウィリアム・テンプルの次のカンタベリー大主教と目されたベルが、敵国人と知己が多いとの理由で結局カンタベリー大主教に選ばれなかったということもベルのエキュメニカル・ムーブメントを通じて得た後のロマ教皇ヨハネ23世を含むカトリック・プロテスタントの友人知人の多かったことを物語る。
- (15) H. E. Fey, ed: op. cit. p.24., R. Rouse & S. C. Neil ed A History of the Ecumenical Movement 1915-1948, S. P. C. K. London, 1954. p.689
- (16) もとより、エキュメニカル・ムーブメントの教会一致を目指した神学研究や合同会議の進展は見られなかったけれども、ドイツ、ポーランド、フランス、或いはイタリア等の各国内におけるナチスに対する抵抗運動の中で教派を超えたキリスト者たちの協力や協働の事例は枚挙のいとまがないのも事実である。
- (17) R. Rouse & S. C. Neil ed. cit. p.719. 非公式なオブザーバーとしてでも参加して欲しいと要請された少数の被招待者達も結局、同教会の出席許可が得られないまま、欠席せざるを得なかったため、一人のカトリック信徒をも含まぬものとなってしまった。この様な冷淡な態度を評して、当時、世界中のプロテスタント教会で最も傑出した神学者と目されていたカール・バルトが、「WCC総会に代表を遣らないローマ・カトリック教会は悪魔に魅せられた教会である」と評した程である。
- (18) 第二バチカン公会議においてエキュメニカル憲章が採択され、教皇9回勅によって鼓舞されたこともあって、世界各地におけるエキュメニカルな集りに対するローマ・カトリックの聖職・信徒の積極的な参与が顕著になった。筆者がその創設から関係する神戸エキュメニカル研究会に於いても、20年来、ローマ・カトリック教会の参加が積極的で、近年日基教団や他のプロテスタント教会よりも熱心且つ勤勉にして、同教会の主導的に担うところとなっている観がある位である。このような

傾向は、単に神戸のみならず、日本各地におけるエキュメニカル活動に見られない  
処でもある。殊に、典礼、並びに聖職位等の問題に関わる討議では、正教会、聖公  
会、並びにローマ・カトリック教会を除く他の教会にとってはあまり歓迎されない  
問題であるかのように思われる位、これらプロテスタント諸教会の出席が激減する  
のも、日本各地のエキュメニカル研究会共通の状況と見られる。

- (19) I Cor. 16:23
- (20) John 17:22
- (21) キリスト新聞1983年（昭和58年）8月13第1853号所掲
- (22) I Cor. 16:24
- (23) Ms. Paulin Webb, Vice Chair-Person of the Central Committee of W. C. C., Moderator of the WCC Sixth Assembly Preparatory Committee and is a Methodist lay preacher from the United Kingdom, she gave this sermon at the opening service of the Assembly on 24 July 1983  
The title of her sermon: The Word of Life. The Ecumenical Review Vol, 35, No 4, Oct, 1983
- (24) Dr, Philip Potter, The General Secretary of W. C. C.はW. C. C.第6回総会の開会式において冒頭の挨拶を述べた。
- (25) W. C. C. Evanston Report p.1.
- (26) Philip Potter:A House of Living Stones, The Ecumenical Review, op. cit. p. 350
- (27) Paulin Webb:op. cit
- (28) Michael Marshall:Renewal in Worship, Marshalls Paperbacks, London, 1982, p.9
- (29) 拙論、黎明期のエキュメニカル・ムーブメントにおける第一回ランベス会議の意義、桃山学院大学社会学論集第3巻1, 2合併号, 1970年3月
- (30) 1982年, 7月W. C. C. がFaith and Order PaperのNo 111として発表したBaptism, Eucharist, Ministryという題目の小冊子に載せられている礼拝一致のための提案, 100人を超す神学者たちが1982年1月ペルーのリマに会して討議した結果, 全員が挙って賛意を表明し得るものとして起草, 確認しあったものであり, そこからこの提案をリマ典礼と呼び, 各教会, 各プロビンス毎に賛否を問うこととなっている。
- (31) Ibid, Book Cover
- (32) NT収録のもの以外にも, St. Jgnatius (Philad, 4) , St. Justin (Apol. 1:66) などにおいて言及されている例を見る。
- (33) ἀνάμνησις は, 英語ではreminder (Hb10:3), remembrance, memory (Lk 22:19), 1 Cor. 11:24f等の用い方がなされており, 現行邦訳聖書では, 「思い出」(Hb), 「記念する」(Lk,) 「記念」(1 Cor.) と訳されている。そして, それ

それぞれの訳語が、微妙なニュアンスの違いをもっており、教会の神学的及説明に用いられる場合には、決定的に異なる内容をもつものとして用いられるので厄介である。

「記念」にしても、卒業記念とか創立記念という使い方とは異って、キリストの臨在を意識するとか、キリストの体と血に変質した要素の实在を意識する、ということになると、この言葉の解釈も、社会の伝統的な見解と背景として理解されなければならない。

(34) 本文中では「祝福」と訳したが、元来ヘブル語 berakah は、「神への感謝」とか「祝福」の意味に用いられたユダヤ教独特の祈りの言葉であった。そこから、公的、私的両方の祈禱招詞としてタルムッドの中で用いられるようになるり、OTでは、このタイプの祈りとしての実例を見ることが出来る。(eg, Gen. 24:27. Job 1:21 Ps.28 :6), そしてキリスト教の教会でも用いられるようになった(2Cor. 1 :3, 1Peter 1 :3)

(35) *ἐπίκλησις* は、もともと、「名前によって祈る」という意味に用いられていたものであるが、キリスト教会のユーカリストにおいて、パンとブドウ酒の上に聖霊を注いで、キリストの体と血に変化するよう祈るものとして用いられるようになった。